

Q-9 いま言われている「高次の資質・能力」とは、どういったものなのでしょうか？

前号では、次期学習指導要領に向けた議論の中で、「どのように学ぶか」がより重視される方向にあることを紹介しました。その中で新たに示されたキーワードの一つが「高次の資質・能力※」です。「高次」という言葉から、「より難しいことを学ぶ」、「一部の生徒だけに必要な力」と受け取られることもあります。しかし、実際には少し異なります。ここでは、誤解されやすい点を整理してみます。

※論点整理の「中核的な概念等」を踏まえ、現在の審議で用いられている作業上の表現です。

1

誤解

難易度の高い問題が解ければ、「高次」ってことですよね？

実際には…

「高次」とは、扱う問題の難易度が“高い”という意味ではありません！

重要なのは、身に付けた知識や技能を関連付け、目的や状況に応じて総合的に働かせることです。したがって、難しい知識を再現する問題であっても、解き方をそのまま当てはめるだけなら、必ずしも「高次」とはいえません。反対に、基礎的な内容を扱う問題でも、

- ・ 複数の知識を結び付ける
- ・ 根拠をもとに判断する
- ・ 条件に応じて考え方を選ぶ
- ・ 別の場面に学んだことを生かす

ことが求められれば、そこでは資質・能力が高次に発揮されています。つまり、「高次」は問題の難易度ではなく、資質・能力の働かせ方を表しています。

2

誤解

高次の資質・能力は、探究の時間で育むものですよね？

実際には…

問いや試行錯誤を取り入れた日々の授業が、高次の資質・能力を育てる場となります！

理数探究や総合的な探究の時間はもちろん重要です。しかし、高次の資質・能力は探究の時間だけで育まれるものではありません。

「なぜそうなるのか。」

「別の考え方はあるか。」

「条件が変わったらどうなるか。」

「他の単元でも使えるだろうか。」

といった問いを通して、知識を結び付けたり、考え方を選んだりする場面は、各教科の授業でもつくることができます。つまり、高次の資質・能力は、探究的な学びを取り入れた日々の授業の積み重ねによって育まれるものです。

3

誤解

これからの時代、知識よりも思考力だけを重視すればいいんですよね？

実際には…

「知識・技能」と「思考・判断・表現」は、相互に支え合う関係です！

知識がなければ、考える材料そのものがありません。一方で、知識を覚えるだけでは、新しい課題や未知の状況には対応できません。知識を使って判断したり説明したりすることで、知識の意味や相互のつながりもより深く理解されます。つまり、知識と思考は「どちらか」ではなく、「両方があるって初めて高次の資質・能力につながる」と考えられます。

BS版ではこれまで、学びのアクション (No.3)、学びのレンズ (No.5)、SSHを意識した授業 (No.9) などを紹介してきました。これらは、知識を結び付け、目的や状況に応じて働かせ、別の場面へ生かす学びを目指すという点で、「高次の資質・能力」と重なります。つまり、BS版で伝えてきた取組は、これからの教育課程の方向性ともつながっているということです。